

『書憤』 陸游

熱誠の人 陸游

書 憤 陸游

憤りを書す 陸游

早歲那知世事艱

中原北望氣如山

樓船夜雪瓜洲渡

鐵馬秋風大散關

塞上長城空自許

鏡中衰鬢已先斑

出師一表真名世

千載誰堪伯仲間

早歲那ぞ知らん世事の艱きを
中原北望して氣山の如し
樓船夜雪瓜洲の渡
鐵馬秋風大散關
塞上の長城空しく自ら許すも
鏡中の衰鬢已に先ず斑なり
出師の一表眞に世に名あり
千載誰か堪えん伯仲の間

【字解】

早 若いとき。
樓船 二階づくりのやぐらのある大きな船。昔遊覧や戦争に用いた。

瓜洲 唐代からの鎮（地方の中心となる大きな町）の名。今の江蘇省揚州市の南。長江沿岸の地域。

大散関 陝西省の宝鶏市西南の大山嶺にある。

塞上 蜀漢の諸葛亮が劉備没後魏を討つため出陣するにあたり後主（主君の跡継ぎの人）劉禅に奉った前後二回の上奏文。

出師一表 両者の間で才能などの優劣の差がないこと。伯仲間は兄と次の弟。

伯仲間 仲は兄と次の弟。

【意解】

若い時にはどうして、世の中のいろいろの難しさがわかるだろうか、この私も北の中原の地を眺めやっては鬪争心を激しく燃え立たせていたものだ。

わが軍の戦船が夜の雪の中、瓜州の渡しを勇ましく越え、また西の方では鎧を着けた馬が秋風の中、大散関の要所に集ったのも私は見た。

この私自身、辺塞地方で万里の長城のような防壁になろうと、いたづらに自負していたけれど、鏡に映る薄くなった髪は、もう私の自負心に先立って半ば白くなってしまっている。

諸葛孔明の「出師の表」はまことに世に広く知られている。あれから一〇〇〇年、他の誰があの名文と肩を並べるに堪える作品を作っただろうか。

〔作者〕 陸游

中国南宋前期の官僚・詩人。字は務観。放翁と号した。越州山陰（浙江省紹興市）の人。生まれてすぐ金の侵入にあり、一家は各地を放浪、陸游が九歳のとき山陰に落ちついた。二十九歳のとき科擧の一次試験に首席で及第。三十八歳で「進士出身」の資格を授かるが、生涯を通じて金に対する抗戦を主張したため、その官途は波瀾の多いものとなった。官は宝章閣待制に至った。六十六歳で故郷の山陰に隠居、八十五歳の長寿を保ち、九二〇〇首もの詩が残っている。北宋の蘇軾と並んで、蘇陸と称せられ、また同時代の尤袤（もしくは蕭德藻）・范成大・楊万里とともに、南宋四大家に数えられる。『劍南詩稿』『渭南文集』『南唐書』などがある。

陸游の詩は、大きく二つの系列に分類することができる。第一は彼の民族精神が発揮された作品群で、抗戦の主張や祖国愛が詠ぜられている。この「書憤」もその一つである。なお彼には田園の情景や農耕生活の諸相を詠じたものも多いが、それらの根底にも同じ精神が脈打っており、この部類に含めることができる。四十三歳の七言律詩「遊山西村」はその一例である。

第二の作品群は、彼個人の資質、感性が強く現われた諸作である。人や事物に寄せる彼の情愛・嗜好は、きわめて率直に、放胆に表出される。たとえば梅の花への愛着を詠

じた次の七言絶句

梅花絶句六首 其三

聞道梅花坼曉風

雪堆遍滿四山中

何方可化身千億

一樹梅前一放翁

聞道きくならく 梅花ばいか坼ぎず風ふうに坼ひらくと
雪堆せつたい 遍あまねく 四山しざんの中に満みつるならん
何れいずの方ほうありてか 身みを千億せんおくに化かし
一樹いちじゅの梅前ばいぜん 一放翁いちほうおうなる可べき

〔訳〕

梅の花が、明けがたの風に吹かれて咲いたとのこと。さだめし降りつもった雪のように、四方の山々に満ちわたっていることだろう。どうかかけて、この身を千にも億にも増やして、一本の梅の木の前に一人ずつ放翁が立っているようにできないものか。

〔鑑賞〕 陸游の決意表明

陸游は中国では歴代の詩人の中でたいへん人気があり一番に推す人も多い。要因として民族主義や愛国主義が関

わっているとされる。この詩は官を辞する前の六十過ぎの時で「六十を過ぎたけれども自分はまだまだやるぞ」と決意表明を新たにしている。陸游は官僚地主の家に生まれ儒教を学ぶ家系でもあり、親戚筋にいわゆる主戦派、「金に対して強硬策を把れ」と主張する立場の人が多く陸游もその思想を受け継いだ。それがために朝廷の実務派・和平派の人にうとまれることになり、生涯の官僚生活の間で四回も左遷、弾劾された。

前半では特に三十代を中心に思い出す。陸游は最初は和平派の秦檜しんかいに妨害されたが南宋二代孝宗皇帝は一時、金に対する積極策を採ったので、その流れに乗れ、そこで意気軒昂、活躍した。そして三十七歳の時、金の大軍(六十万から一〇〇万の兵)が南下した。それを迎え撃った南宋軍は、珍しく優勢になる。それをうたいこめている。今は金の領土となった中原の地を眺めては鬪争心を「気山の如し」と表現し情熱が無限に湧き上がるようすを示している。「瓜洲の渡」「大散関」は二つの戦場の地名で「南宋の活躍をこの目で見て、南宋もやればやれるんだ」ということを強調している。後半は「私もそれに加担しよう」「わが身を万里の長城のようにして敵から漢民族を守ろう」と自負していたが、むなしく歳月がたち髪は半ば白くなってしまった。「それでも私はやるぞ」と蜀の諸葛孔明が劉禪に奉った「出師の表を思い起こす。『出師の表』に肩を並

べる作品を作るのは誰もいない、しかしそれを作ることで自分の役目だ、私もこれからだ」と決意表明で締めくくっている。

【時代背景】

女直じよぢく(ジュシエン)が金国を建国

女直(女真)族はトウングース系の言語を話す森林地帯の狩猟民で、久しく契丹きったん(キタイ)帝国に服属していた。ジュシエン語はのちの満州(マンジュ)語の祖語である。ジュシエン人も、キタイ人と同じように、漢字に手を加えて自分たちの言語を書き表わす文字を作った。

一一一四年、ジュシエン族の完顔かんがん(ワンヤン)部族長の阿骨打あぐだ(金の太祖)がキタイと開戦し、翌一一一五年、独立して大金皇帝の位につき、金帝国を建国した。

金軍はキタイ軍に連戦連勝して一一二〇年にはキタイの首都上京臨潢府じやうけいりんわうふを占領した。キタイの天祚帝てんそていは南モンゴルに逃げ、羌族きやうのタングト族が一〇三八年に建国した西夏せいしか王国に這いろうとしたが、一一二五年、天祚帝が南モンゴルで捕えられ、キタイ帝国は滅亡した。

金軍は引き続き宋に侵入し、一一二六年、開封を占領して宋の徽宗きせう・欽宗きんせう父子をとらえた。金軍は王族を多数とらえて帰国した。のべ三〇〇〇名が北方に拉致され、皇女たちは全員が金人の妾にされるか、洗衣院と呼ばれる売春宿

に送られ、韋皇后を除くいづれもが死ぬまで帰還することはできなかった。

金帝国はキタイの領土をほぼそっくりうけついでうえに、華北の地は淮河にいたるまで金の領土となった。欽宗の弟康王趙構は南にのがれ、一一二七年に南京で皇帝の位についた(高宗)。これからあとの宋朝を南宋といい、これと区別するために、それまでの宋は北宋とよばれる。

一一三八年、南宋の高宗は杭州(臨安)に都をさだめ、一一四一年、金と講和して臣と称した。金と南宋の境界線は淮河と大散関を結ぶ線とされ、南宋は淮河以北の旧領(かつての首都開封を含む)を放棄させられた。さらに南宋は金に毎年絹二十五万匹、銀二十五万両を贈らなければならなくなった。つまり、南宋が金に朝貢するという立場になってしまった。

引用文献

- 松浦友久編『漢詩の事典』……………(大修館書店)
- 宇野直人・江原正士『漢詩を読む④』……………(平凡社)
- 朴漢濟編『中国歴史地図』……………(平凡社)
- 岡田英弘『読む年表中国の歴史』……………(ワック)
- 周藤吉之・中嶋敏『五代と宋の興亡』……………(講談社)

